



[令和8年5月16日 定例会発表要旨]

「赤い靴はいてた女の子」

手稲郷土史研究会 会員 梶本 孝

「赤い靴はいてた女の子」の童謡は、皆さん小さい時から誰から教わったのでもなく口ずさんでいた曲(歌)ではなかったでしょうか？ この童謡「赤い靴」は、大正10年に野口雨情によって書かれ、翌大正11年に本居長世が作曲したものです。

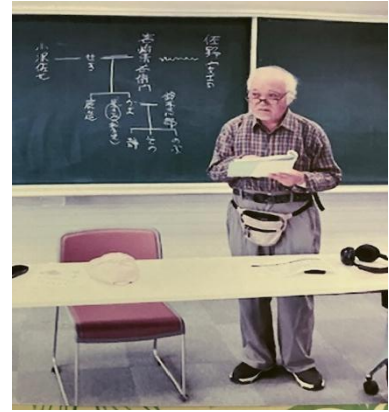
その銅像や碑が神奈川県横浜市、静岡県日本平(清水市)、東京都麻布十番、北海道留寿都村、北海道小樽市、北海道函館市、北海道札幌市中央区、青森県鱒ヶ沢など全国各地に建立されています。

ご存知の方もいるかもしれませんが、札幌の山鼻公園に「赤い靴」歌碑が建立されています。モデルとなった赤い靴の女の子の実名は「岩崎きみ」で母親は「岩崎かよ」で私生児としてこの世に生まれてきました。「岩崎きみ」は明治35年7月15日、日本平の麓、静岡県旧不二見村(現 静岡県清水市)生まれです。「きみ」は赤ちゃんの時に、色々な事情で母親「岩崎かよ」に連れられて北海道函館にわたります。ここで「岩崎かよ」と「鈴木志郎」は恋に落ちます。二人は共にユートピアの社会づくりと社会主義の伝道をめざす平民社に入り、明治38年に現在の留寿都村に開拓団の一員として入植します。この時に、「きみ」を厳しい開拓の村に連れていくことを諦め、メゾジスト系のアメリカ宣教師ヒュエット夫妻に養女として預けることになります。

しかし、火災の発生、資金不足、荒れ地のため開拓が思うように進まず夢破れ2年あまりで札幌に引き上げます。新たな新天地で「北鳴新報」に就職します。そこで同じ会社に就職してきた「野口雨情」と知り合い、山鼻に一軒家を借り一緒に生活する事になります。雨情は後年「鈴木かよ」から聞いた「外人に養女に出した話」を思い出し「赤い靴はいてた女の子」の詩が誕生します。「赤い靴」のみなもとは、札幌の山鼻にあり、石碑が建てられた経緯も理解できると思います。

その後の「鈴木志郎」夫妻は波瀾の人生を送ることになります。札幌の北鳴新報を辞め、野口雨情、石川啄木らと「小樽新報」に3人そろって就職します。それも新聞社の内紛で雨情も辞め、啄木も辞め、新聞社は倒産の憂き目にあい志郎もはじき出されます。その後、志郎夫妻は、室蘭、夕張、樺太と渡り歩き、小樽の富岡教会の近くで最後を迎えます。

養子に出された「きみ」はその後どうなったのでしょうか？ それは昭和48年の北海道新聞夕刊への投書がきっかけとなります。投書の主は「岡その」。書かれている内容は「私が生まれた十数年も前に日本を去った姉。今となつては、顔も姿もしのぶよしもありませんが、瞼を閉じると赤い靴をはいた四歳の女の子が、背の高い青い目の異人さんに手を引かれて、横浜の港から船に乗ってゆく姿が目に見えます。この姉こそ、後年、野口雨情が『赤い靴』に書いた女の子なのです」。岡は「きみ」の義理の妹。つまり、のちに



鈴木と「かよ」の間に生まれた3女だったのです。

その妹が ♪いじんさんに つれられて いっちゃった・・・♪ 姉を探してほしい、生きているなら会ってみたいというおもいから投稿したのです。

この記事を見た HBC テレビの菊地寛さんがアメリカや全国各地を駆け巡り調査した結果、「きみ」は東京麻布十番にあった孤児院で、不幸にも不治の病と言われた結核に冒され、九歳の短い人生を終わらせていたことがわかりました。3歳で母と別れ、6歳で育ての親ヒュエット夫妻とも別れた「きみちゃん」は、ただ一人看取る人もなく、古い木造の建物の2階の片隅で病魔とたたかい続けました。熱にうなされ、母「かよ」の名をか虫の鳴くようなか細い声で何度叫んだのでしょうか。温かい母親「かよ」の胸にすがりたかったでしょう。秋の夜、「きみちゃん」は孝薄い生涯を終えました。母「かよ」は「きみちゃん」が、アメリカの地で幸せな生活を送っていることを信じて亡くなったことが救いです。この調査が波紋を広げ、ゆかりの全国各地に「赤い靴」の像が建てられました。

最後に、最近「親が子を、子が親を殺める事件」がテレビのニュースで報道され、殺伐とした気持ちにさせられます。このような時代だからこそ「母が子を思い、子が母を思う親子の情愛を大切にし、平和な日本」であることを願いながら、私の短い人生を謳歌していきたいと思えます。

石狩市郷土研究会と交流会

令和8年6月8日午後1時30分より、中央区永山武四郎邸の2階座敷にて第1回「石狩市郷土研究会・手稲郷土史研究会の交流会」を行いました。石狩市郷土研究会が村山会長はじめ9名、手稲郷土史研究会が沖田会長はじめ7名が参加しました。



最初に沖田会長の挨拶で手稲郷土史研究会の活動状況の説明、続いて石狩市郷土研究会の村山会長より、昭和35年の創立時の経緯をはじめ、創立以来66年間の活動状況(研修旅行、発刊図書ほか)の説明をいただきました。その後、各出席者より、自己紹介があり、懇談およびお互いの課題等について質疑応答がありました。

共通の課題としては、会員の減少問題が話し合われました。石狩市郷土研究会の発刊図書は、年1回の会誌「いしかり暦」をはじめ調査研究の成果をまとめた「石狩の碑」、「石狩市小中高等学校校歌集」をはじめ「いしかり郷土シリーズ」9冊にのぼり、その他にも多くの関係図書を刊行しております。「石狩郷土シリーズ」は、都度プロジェクトチームを作り、2～3年かけて調査をした結果をまとめたものです。今回の交流会で忌憚ない情報交換が出来ました。またこのような交流会を続けたいとの合意が得られました。

手稲区史跡案内板修繕

昨年、手稲区史跡案内板の清掃を行い、手稲区地域振興課に写真を添えて破損をしている案内板について修繕を求めていましたが、6月8日に予算が取れたとの連絡がありました。早速、6月9日に地域振興課を訪ね、宮野課長他2名に面会し、修繕の概要の説明を受けました。本年度は、「日本石油北海道製油所跡(マップ番号 16)」「極東練乳(株)三楽酒造(株)跡(17)」、「前田の遺跡(18)」、「手稲遺跡(21)」、「自作農記念碑(38)」を予定している。見積もりを取って、最終的に決定するので変更がありうる。また、「ふるさと手稲の史跡案内板につて」の最後の「制作:手稲区」の後に「/協力:手稲郷土史研究会」の文言を追加していただけるとのことです

次回定例会 令和8年7月18日(土) 13時30分～ 区民センター3階視聴覚室

発表内容 「測量と地図の話」

国土地理院北海道地方測量部次長 小野里 正明 様

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第218号 令和8年6月20日発行

発行責任者: 沖田紘昭 (手稲郷土史研究会 会長) 編集: 菊池博行・伊藤政克

❖006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会

*TEL 090-3381-4994 *FAX 011-682-9874

❖メールアドレス teinenorekishi@gmail.com 担当 菊池 博行